

ケース1 漢字は手で書かなければならない？

ケースを読む前に

- ①あなたは手で文字を書くことが困難な学習者に接したことがありますか。
その学習者は具体的にどのような困難を抱えていましたか。
- ②手で文字を書くことが困難な学習者は、言語学習を行ううえで、どのような困難があると思いますか。
- ③言語を学習するうえで、文字を手で書くことは必要だと思いますか。それはどうしてですか。

学習障害の一つに手で字を書くことに困難を抱える書字障害があります。外国語の学習に限らず、学習においては、これまで伝統的に、板書を書き写す、手で書いて覚える等、手で書くことが重視されてきました。しかし、近年の急速なデジタルデバイスの発展により、学習において、手で書くことは必ずしも必須ではなくなってきています。BYOD (Bring Your Own Device) を推奨する教育機関も多くなってきました。一方で、特に日本語教育や中国語教育、あるいは国語教育において、漢字を学習する場合、手で書くことが必須であると考えられる教師も多いようです。

本ケースでは、手で文字を書くことに困難を抱えた学習者に関するケースをとおして、学習障害を抱えた学習者を包摂することの意味や多様性と言語教師のビリーフの関係を考えます。

ケース1: 「パソコンで入力する期末試験」を希望します。

山本千里

わたしは大阪にある学生数の多い私立の総合大学で、非常勤講師として中国語を教えています。おもに第二外国語として中国語を学ぶいろいろな学部 of 学生のクラスを担当しています。この大学では、第二外国語を必修にして2年間学ばせる学部もあれば、必修は1年間で2年目以降は自由選択にしている学部もありますし、完全に自由選択の学部もあります。選べる第二外国語は、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語です。

必修にしている学部の学生の動機づけの強さはさまざまで、熱心に授業に参加する学生もいれば、必修なのでいやいや参加している学生もいます。ただ、熱心に授業に参加している学生であっても、コースが終了した後も学習を続ける学生はとて少ないと思われる。

わたしが担当する経済学部1年生のクラスに中野さんという学生がいます。彼は「手書き」を苦手としています。このクラスは、中国語未習者のクラスで、週に2回の授業があります(もう一方の既習者クラスは他の教師が担当しています)。ありふれた構造中心の入門用教科書を使い、知識を問う筆記のテストと、パフォーマンスを何回かさせて、それらを併せて評価しています。受講生は30名ほどです。

中国語は漢字で表記するため、中国語の学習には漢字を手で書く作業が欠かせません。中国とシンガポールで使われている簡略化された字体の漢字(簡体字)にせよ、台湾と香港で使われ

ている伝統的な字体の漢字(繁体字)にせよ、戦後の日本で使用されている新字体とは異なる文字もあるため、漢字を覚える学習は欠かせないと考える教師が一般的です。

中野さんは、「手書き」を苦手としているため、教室にパソコンを持ち込み、それでノートを取っています。この大学は、BYOD (Bring Your Own Device) を推奨しているのですが、それは珍しいことではありません。しかし、授業中に、紙に手書きする必要がある課題(小テストやワークシートへの記入)を与えると、彼の提出物に書かれた文字が汚く、教師には判読できないこともあります。また、不正確に書かれた文字も多く見られます。さらに、中国語特有の漢字も上手く覚えられないようで、何度教えてもすぐ忘れてしまいます。

わたしが、冗談混じりに、「あなたは漢字を手で書かないから、覚えられないんだよ」と言うと、中野さんは自身が手で書かない事情や手書きを求められることによる苦勞に関し、次のような話をしてくれました。

- ・わたしは子どものころから文字を書くのが苦手で、漢字も覚えられないし、自分で書いた文字が読めないこともあるし、手書きで文字を書くのに人の3倍の時間がかかる。だから、パソコンを使っている。
- ・「振り返り」を書かせる授業が多いが、Googleフォームなどに入力させる授業もあれば、紙に手書きさせる授業もある。後者の場合は、書きたいことの3分の1も書けないが、パソコンで入力できればもっとたくさん書けるはずだ。
- ・どうも書いた量で成績を決めている授業もあるらしい。成績が悪いのは、手書きで振り返りを書く授業が多いからだ。

学期末が近づいてきました。中野さんは、ある日の授業の後、わたしのところにやってきて、「この授業の期末試験の答案をパソコンで入力することを希望する」と言いました。彼が言うには、「自分は、科目を問わず、制限時間内に解答しなければならない筆記試験を課す授業の成績が悪い。それは、答えがわかっているのに、手書きだと時間がかかって書ききれないからだ」とのことです。中野さんは、「もしそれが不可能なら、筆記試験ではなく、他の評価方法ではだめだろうか」とも提案してきました。しかし、評価の方法はシラバスに記載してあることでもあるし、自分は非常勤講師なので、それを簡単に変えることはできません。

「パソコンで入力する期末試験」を予想だにしていなかったわたしは対応に苦慮し、試験時間を1.5倍にすることを提案しました。大学入試センターの試験などでも、学習障害のある受験生には、最大1.5倍の試験時間の延長を認めていることを知っていたからです。また、試験時間が延びて嫌がる学生はいないので、他の受講生も不審に思わないだろうと思いました。しかし、中野さんは「1.5倍では足りない、マークシート形式と論述形式では比較できないほど時間がかかるから」と言います。「3倍の時間があれば・・・」とも言いましたが、さすがに試験時間を3倍にしたら、他の受講生が不審に思います。

わたしは「特別扱いは難しい。配慮申請でも出ていけば別だが」と言いました。正直なところ、わたしは「中野さんは書字障害に類するような障害があるのではないか」と疑っていました。しかも、彼には自分でもそうした自覚があるようなのです。しかし、この大学では、素人の教員が「あなたは〇〇障害みたいだから、医者診察を受けたほうがいい」と学生に言うことは厳禁です。そこ

でこのようにほのめかしたわけです。しかし、中野さんは、この弱点を他人に知られるのがとても嫌なようでした。

中野さんはさらに「自分だけを特別扱いにしてほしいわけではないので、期末試験はクラス全員にパソコンでの入力を認めたらどうか」という提案をしてきました。しかし、学生が持参のパソコンを使えば、漢字変換は自在だし、インターネットにアクセスして、機械翻訳のサービスを使うことも可能になるため、出題する内容や形式そのものを新しくしないといけません。

わたしが苦し紛れに「中国語という言語にとって、漢字は切り離せないものだから…」と、ごによごによとつぶやくと、中野さんから「先生は、台湾の点字も中国の点字も、漢字を表しているのではなく、発音表記用の文字を一つ一つ点字に置き換えているだけだとおっしゃっていました。では、眼が見えない人の学んでいる中国語は、ほんとうの中国語ではないのですか」と問い返されました。

今、中国語の科目のコーディネイターである専任教員に「希望する学生にはパソコンで入力することを認める試験問題に変更してよいか」と問い合わせているところです。

いろいろな声

中野さん

山本先生がおっしゃることが理解できないわけではありません。たしかに手で書いたほうが単語も覚えやすいかもしれません。しかし、私にとって手で書くことはそれだけで苦痛を伴う行為です。だから、特に成績に直接影響する期末試験は手書きを含まない形式で行ってほしいです。HSKネット試験、TECC、TOCFLのように手書きを求められない検定試験があることからわかるように、手書きをしなければ中国語の能力が測れないというわけでもないと思います。また、私は自分だけを特別扱いしてほしいと思っているわけでもありません。クラスの学生全員がパソコン入力で試験が受けられるのであれば、不平等は生じないと思います。私の主張はおかしいでしょうか。

山本先生（非常勤講師）

中野さんが手書きで苦勞しているということはわかるし、試験の方式を検討してほしいという主張が理解できないわけでもない。しかし、私は中国語教師、また中国語学習者として、中国語学習において、漢字を手で書いて単語を覚えるという過程が必須であるという信念がある。また、中野さんはもしかすると、学習障害なのかもしれないとも思う。それならそれでは個人的な信念とは別に合理的配慮をする必要があるとも思うが、彼が自身で学習障害であると申告していない以上、正式な手続きを踏んで、特別な配慮をすることは難しい。さらに、もしクラスの学生全員がパソコン入力で試験が受けられるようにすると、そのための準備も大変になるし。正直、どうするのが一番いいかわからない。

専任の先生(科目コーディネーター)

私には、科目コーディネーターとして、すべての中国語科目で期末試験が一律に同じ条件で実施されるよう管理する責務がある。一律に同じ条件で期末試験を実施するという観点から考えれば、「希望する学生にはパソコンで入力することを認める試験問題に変更する」という提案は認められない。なぜなら、パソコンで回答する学生と手書きで回答する学生で有利不利が発生する可能性があるからだ。また、パソコンで回答する場合、どうやってカンニングを防ぐかという課題も発生する。

中野さんに関しては、本人から配慮申請が出されていない以上、期末試験に関し、特別な配慮をする必要はない。大学には大学のルールがあり、この大学における活動はすべてそのルールにしたがって、運営されている。この大学の学生である以上、中野さんには大学のルールにしたがって、学生生活を送ってほしい。そのような態度は、彼が大学を卒業して、社会に出た後でも常に求められるはずだ。

ケースについて考える

※ケースについて、個人レベル、学習空間レベル、社会レベルという三つのレベルの問いに即して考えることをとおし、ケースが埋め込まれている状況を詳細かつ多面的に理解します。

※いずれの問いに関しても、明確な答えはありません。ケースをもとに、各自で想像したり、グループのメンバーとやりとりしたりすることをとおし、自分なりの答えを見出します。

問A.個人レベルの問い

Q1: 中野さんは手書きが苦手であることによって、これまでどのような苦勞をしてきたと思いますか。

Q2: 中野さんはどうして「手書きが苦手」という弱点を人に知られたくないと思いますか。

Q3: 山本先生はこれまでどのように中国語を教えてきたと思いますか。

Q4: 山本先生はどうして中野さんの提案が難しいと思っていますか。

問B.学習空間レベルの問い

Q1: この教室では普段どのように授業が行われていると思いますか。

Q2: この教室をダイバーシティ、インクルージョンという観点から見た場合、どのような問題点があると思いますか。

Q3: この大学では、多様な学生に対し、どのような配慮が行われていると考えられますか。

Q4: 中野さんのような学生に対応するために、大学としてどのような仕組みが必要だと思いますか。

問C.社会レベルの問い

Q1:教室に多様な学習者が混在する状態についてどう思いますか。

Q2:教室の秩序を保つことは大切だと思いますか。それはどうしてですか。

Q3:言語(外国語)の学習に手書きは必要だと思いますか。それはどうしてですか。

Q4:言語(外国語)の学習の過程でこれは必ずやったほうが良いといった言語学習に関する信念がありますか。それはどのような信念ですか。

ディスカッション

これまで問いに沿って考えてきたことを踏まえ、山本先生は中野さんの要求をどのように受け止め、具体的にどのように対応すれば良いと思いますか。

解説(未執筆)

※本ケースの背景をより深く理解するために必要になるとされる次のような事項に関し、歴史的経緯や言語教育研究における研究成果、研究動向等を解説する。

- ・言語学習に関する言語教師のビリーフ(例:言語教育/学習における手書きの位置づけ)
- ・言語教師における統制的指向
 - 「同一レベルの学習者を同じクラスに集めたほうが良い。なぜならそのほうが学習効率が上がるから。」
 - 不確定要素を事前にできるだけ排除しようとする準備主義的傾向
- ・ことばの教室における学習者の多様性
- ・言語教師およびことばの教室と合理的配慮
- ・ことばの教室における「平等」「公平」「公正」
- ・共に学ぶ場としてのことばの教室